茶湯教訓論 上下

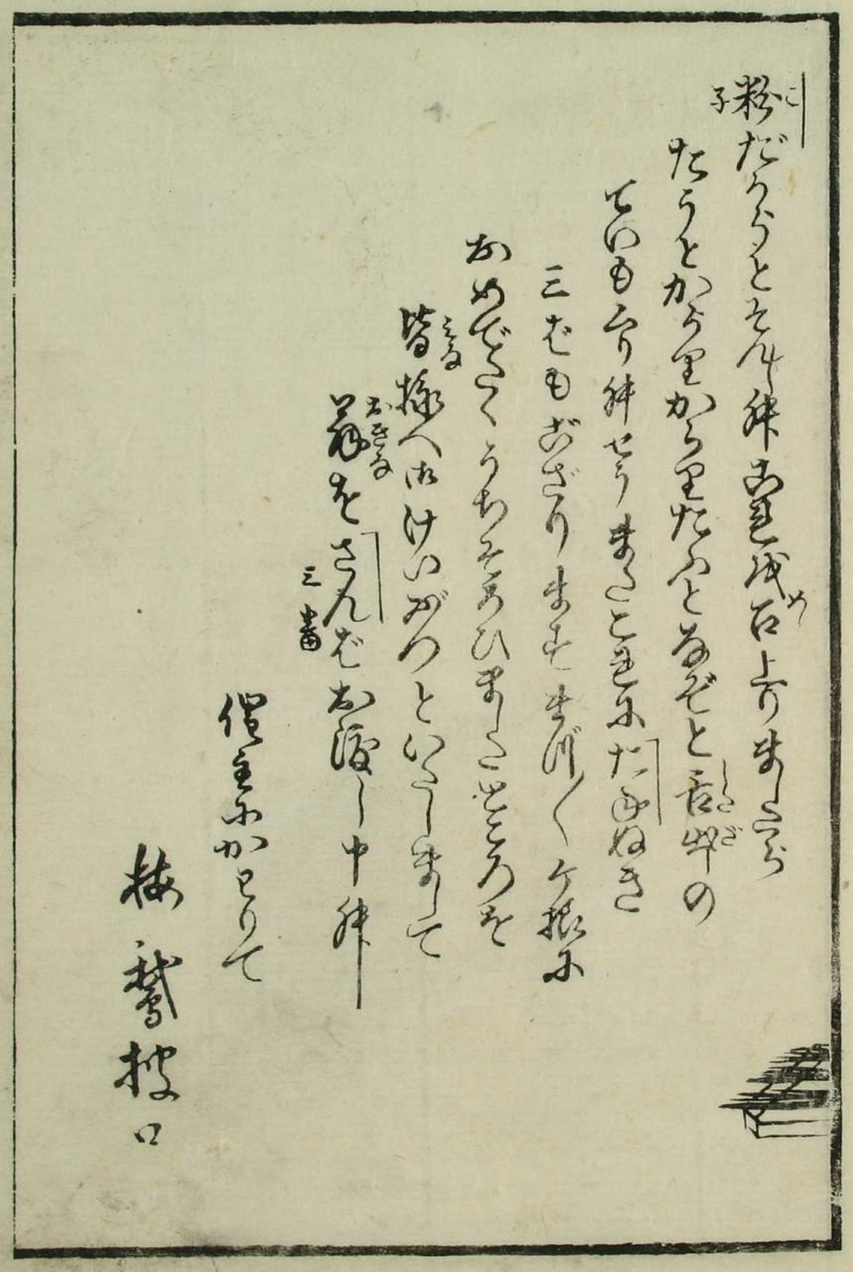
入遠洋
1865
1/24

門へ遠13
1865
2冊
1-2

鼻さきはゆん俤ゝもばゝれ大きふおせ話お茶でゆ
ありれぷゝ乳ぬゝもち尻を端折てふみちかく。
雲霧真子恵久保の裏ゝ絵牡丹餅の酸醢
土瓶乃口のゝい出ゝうぶゆ花ゝう呑ゆふのゝ
さゝん俤雨云

三番叟

扨法一統様へ中上様何が私まぐこまそうこうぐ〻の身とゐて様で三実そうあきるるとてうぞとゐおひひもとろるるとぞんど様ぐ実め〻皆様ぐからくゝ下あるとろひもうり生をうぐ僧主のたのこゑまるせ義名代の西くゝ様おはとゐ様世ろふうり様伺年かぐ紀ところはうちもそたぐ月光くゝとあるとぐひのわどをお形様サテあまこふ七色とうり様まぐいづき



粉だうとそん様あまこ成石上りまこぐら
たうとかうまかうまたふとるぞと長年の
ものもう様せう まこと きまふたゆぬき
三ともおざり まこと きまく ケ様ふ
おめでくうちそろひまこそろを
皆様へはけいがつとゐくまして
義そ さんだ 中様
三番

僧主ふかとうて

梅賀楼

玉手箱

[illegible]箱と中[illegible]り絵一す

[illegible]

さろりの時[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ざく[illegible]と[illegible]

[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

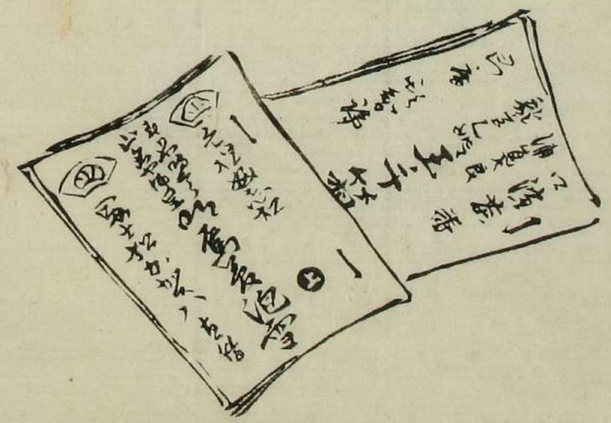
[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ものでかりたまふ

[illegible]

[illegible]りませふと中上まつ[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]せらまさうがさろもそきのうちで

[illegible]りまのしまでのおとひめふうかをきて

ツイはあをあけがらもふいさ絵と

たちまちおきるくのもぐることありまさ更人

あるハ箱でハなのふとそれまりまさ

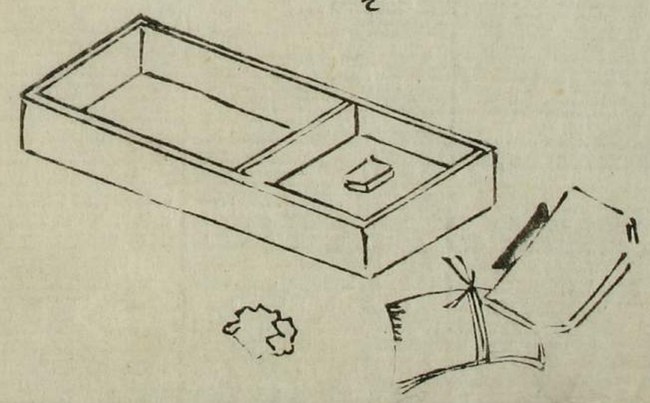
はらんの毒りろ法ありあさの

げごのごく河豚とぬまして今絵

蜀士松加賀八

宮女

宮女とゆ　お酒でムリ拵えまづ
[illegible]　[illegible]のてのを[illegible]ふ
いま拵サテは巣内のぞく
京の[illegible]あそんのめをもりまさ
[illegible]のでくだとゆるでムリ拵出も
[illegible]より大内のてのをぞらんよ入拵
まづ[illegible]大きく[illegible]
「大うちでもムリ拵　まこと大内の
まつり　おいろくの小おくくもムリ拵
[illegible]の[illegible]小[illegible]はより出まもまづ



「ひのもうまでもムリ拵ふまこほくちのもありまこせろ夫
「[illegible]あふぎろとそんど拵とみくちをまゆ拵ふ[illegible]の
うらへ[illegible]ふまもあるそへへ白ホろとそんど拵
[illegible]ふ[illegible]ぎろムリまもそがもものとそんへまて
よろど「さけがみもそんへ拵　つけホのさけ　ちと数も
[illegible]くろとぞんど拵ぞろ[illegible]ぞあてそんて拵
てろど「十二ひとそんムリ拵ゆ数をあらこそん
まこ[illegible]ちゆ　宮女でムリ拵

宮女

七艸の内

あさがお

朝がおと申　あさがほ　ふくさう　牽牛

あさがほの花の開ふ入候

これハ夏つく　ハうらんとく　と申候

秋ハ　ゆふ　顔ごんふも　咲ます

もちろんゆふもしぼむ

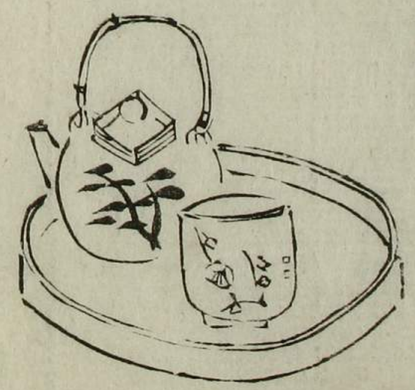
たくさんなり候　花ハ四ふも　朝ハ

いろ〳〵あく　咲さうよう　なり候　口ハ　あて

まるとと　申ます　花いろふも

だけまるとハ　口もあがりて　なり候

菓莊筆



あさがほの花ハ　夕ハ　しぼまるもの

せりなハ　ふまる　花　ハ　ふくらびまるもの

あさがほ　ひるハ　ハ　なり候　菓莊述る

あさがほの花ハ　夕ハ　しぼまるもの

せりなハ　ふまる　花　ハ　ふくらびまるもの

あさがほ　ひるハ　ハ　なり候　菓莊述る

つるのもふたくさんつくしなりまた　いづまふも

あさがほのさうりハ　がん　盃　茶碗　ふかぎり　候

あきはとをとあるくとのべ　候　ハもこさぐ〳〵　なり候　まど

かまうふつきまもと　あるり　咲ふ　ハ　ふ　ハ　さて　実もはも

あるり　まもの　ハ　を　ふり　候　ハ　ハ　ハ　つぐ　ともや　候

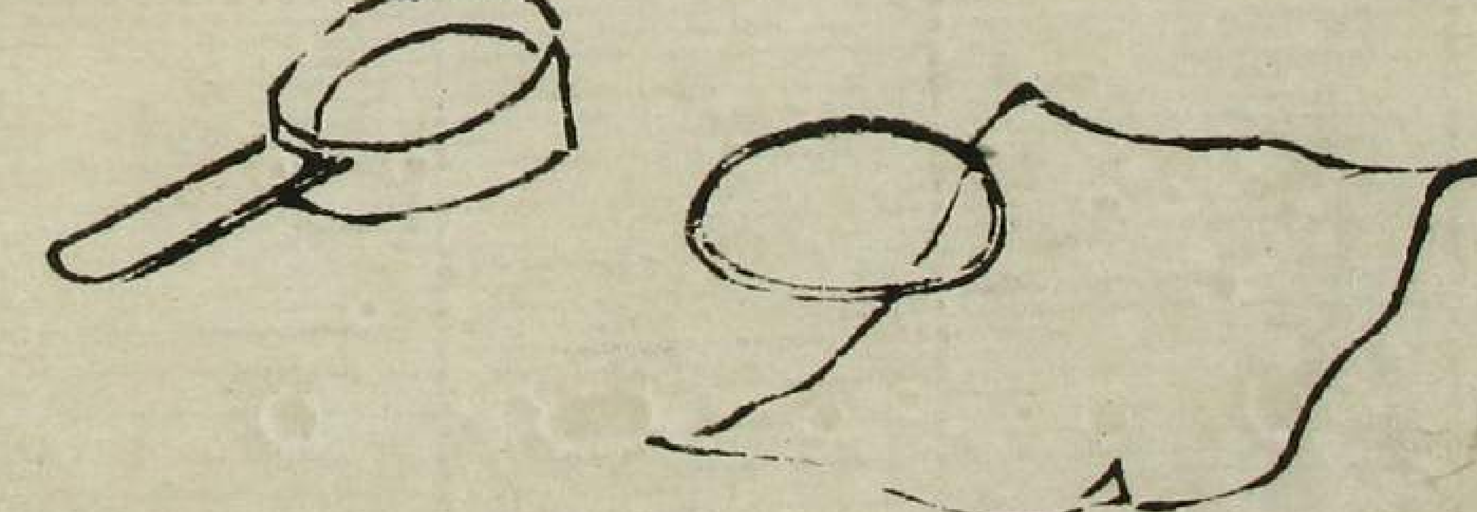
はるもの　なり　候　つるのびまぎまもと　ちふ　はふて

あるりあを　ふりまもだまもと　あるうふのめまも

東海道五十三次之内

寄掛川宿 頬白鳥

ここハかけがはのしゆくにおよせるほうじろと
申鳥おさんをいくさきまでつれ帰
お茶えんと申ますそのわけハ
はじめて出合へ何と申ましますて
ころしひとりいろいろ言ふも
はさみますやねがふんでもお茶だんご
からおちや流さきまゝこれので申上まする
よいをごとそんじまてこのお茶ほうじを
もつてまゐりまして出でほうじろくと



いつまでもとおもひつきましたが皆色がかはり
それハかはいくとおつきありまするが品じんの香り
さとがおざりませんこまそれ故「のよほとハ
できませんからどうかしてまゐりまして
帰りにハ家も御手まへ仕舞かみを
「かけ川にて仕舞ひたらこれでハ
海ほうじろもいつまでもいやと
そんじ鳥

橋町
かまた ぬきさ女

秋の七草

秋の七草と申伝へ候へ共
是は七草の鶴ヶ城へそろへて
四種ふ入まゝサテあの通り
地ぢいはぎりませんかりで
あるわど赤もぎんそいつてゝ
そを西人ぢいかんかるう　ケリ体
いつまゝまゝ別ちきつ（木京）ぬう（拙）かつうりめで
ケリ体　いづも女中ぐこのめ　体四人
「ぢつるゝ」　うとそんぢまゝ
こゝぢそケリ体ケ振ふあるせまつくら

菊花茶

「ちちん四本」　ふもゝのうませう何うつろ舟と
　　ア人くまつて　むつこさもこ人まゝもめこぢろう
けふふ河ケ　ケリ体ケ　さとりふもゝ　ぬきもゝん赤て
　　こまゝもと　河はクゝうろ　ぢそんぢ体まこ
はきゝのでケリ体きいたぎ　のこんもうません
　　サテのこちぢそこきこの中　茶くを
　　中ゝまつこ人　秋でんうません
　　あつ　のセくちうと
　　そんぢまゝ

梅秋雪　述

歳の市

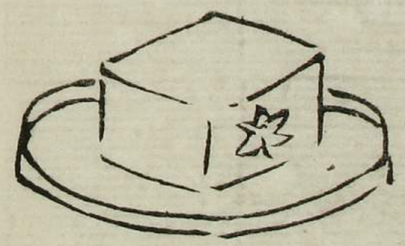
年のいちとやお歌ふ年男
おくだくりらのものを為そろへて
あめふらけまをさて是へ
「かざりつれまーるあらりのハ
はらんの乗りまなこハ
かちぐりでひらひふ「だのくの
ゆうる「あぶもの年ぼへ
「ゑびふちりもあります」て
よわどありーやふる年さぶめ
年じさきでいだんぐ「ねまろを

そんぐ年まの産ぶさんもだんくと
かあをたなあまーて為まのいこうとうえんぎ年うの
「ゆづりそをこうてそうろくふもめ年でのう年
あらーこうのいとまるあ年さん男うちと
きのてあきます　ゆうとそんぐまーてたろのまーこう
「どころハ浦茶へんぐと中年男「ゑんたうらまちかと
きこまーこうイエ「ゆぶこうのうりどろふ「ゑみ年そと
十　男へ名ハ何ものと聞まーこうと「の市だこ
中年

五穀の出來秋

養菜主

五穀の出來秋とは穀ふ分ふ作私の在所にてはくらもふ人ふ出ます片田舎へ穀を出張ふ入出ます事とそんじまして穀ふ作ります事ところが一丁出て小出丁あるきまして六体を出ます作くらちがあきません出を出せしたひきくとうの穀をいきもきらぎそふ引てまいりまして出をもあつけまして荷カラ積へ大豆をもまーまりサテ積へ大豆をもあきまして粟あとにいろーいろくふせいー方を



米角あるふ分作ぶ仙蔵のきみもたてうあへのわまりあふ
きりあみ粉あとところをたちあがつとえんへまして
いまふあつとちのりんどころが付てあり作モウおとと
そんじて作ふそばくおきまして一ものうの出來秋を
もあくとそんじ一体の穀をあるひまして申く
五合のちをも出ません所をもぎおどつけふ
ようく二合半俵の出來ふありつきまして
ハリ作

三係の松

菊莊筆並述

おなじくハ三係の松と中絃むく
さの系ふ係ゆとあら中絃濱人が
天人とちぎりをむすびしとやるぞ
ムリ絃ぞ引おきゆくを「まつとも中
ま絃ハいづれも横ヨあり絃ぞ
「まつとちも寿ま」ありサテ松系の
松のかつこうハよくそろひてあり絃
まるもちらの系ふの「松の伝もこる
くそろひてありまそこ係ハまつ
言系づらひもあのづらら天人風ふあり絃

まるこ濱又も姫人も軟遊のムリそでの
松系ふハんとまてちり絃ぞあハ濱んるぞ
ムリマ絃ふろこハまんるぞ中絃又松ハさろくを
ら花ハ絃をむくと中あらハとムリ絃ムリ山松もムリ
絃ぞ三係せんをむさいろく婚歌をうくひまそ
めとムリ大きる系でもムリマ絃ふ迫ゆ夫ハ「あみ笠」細
系ゆとやーグムリ絃ぞハ濱系の縁もムリ絃
いづれもぞハち巻軍で作るムリまるこ
「ところけるとらくぎもムリ絃サテ三係と中絃ぞ
入濱ごと中絃ぐあるぞハ濱の「方」で作ムリ絃

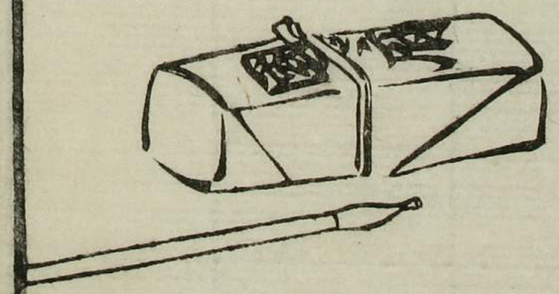
3年 10月

なまえの先人

玉藻前

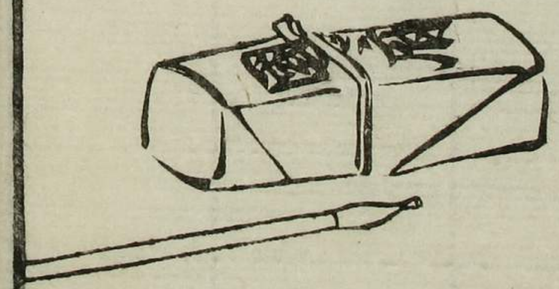
ときこーへのあるのせんとかおもて
ゆり姫のゆくさつそくあるものあり
たつのふまのりまもとおりよく
びんのかみ一ぱりよあのまーとトキヒル
出発の五りあるこ及び九くく
ぞのびんとふりもよろーうゆ姫
一すまのこちらのぞひそおろ
まーどうろむろふぐめのそうで
ゆり姫そまろうら 和尚をたのこ
まーこちらぢきみなるのまをろそ

墨荘字



玉藻前

ある時
ここ二ーへのあるのせんとの中おしゑで
ゑり洋のあさうそくあるものの事
たつてゆふせまりせまるとおりよく
びんのふかーかうはあのせーさトキセルを
出撰の事りあるこなげ名く
ぎのびんとふりもよろーうゑ洋
一すまへのちちうのぞひておろ白
ゆーどうろむうふぐめへそうで
ゑり洋そまうう和あるをたのこ
ゆーこうぢきまたなるの生をとろて



巣花子